異能の政治経済学者ハーシュマンの理論と思想
－再評価と現代的意義－

名古屋外国語大学（非常勤講師）　　高橋　直志
（E-Mail:　conosur.gala@gmail.com ）

はじめに

近年、経済学の世界では人間の心理と経済活動の関係を考察する分野（行動経済学、経済心理学など）が注目を集める一方で、経済政策の是非を論じる際にインプリケーションの導出を急ぐあまり、因果関係の単純化と客観的なデータ分析に基づくエビデンスの提示が求められ、議論そのものがパターン化しつつある。たまに徹底的に対照実験を試みる面白い文献[1]も散見されるが、率直に言えば、突拍子もない思いつきから証拠を織り交ぜつつ、型にはまらない議論を展開する研究と、「先行研究の整理→仮説→実験・シミュレーション→検証→結論・今後の課題」という無難な手順を踏んだ研究の間に、建設的な対話が生じる機運に乏しいまま時間をやり過ごしている、という印象が拭えない。学問の専門化・細分化が進んだ結果、と言えばそれまでだが、それに見合うだけの大きな突破口が見出しにくい経済学の現状を思えば、「型破り」と「型通り」の擦り合わせも研究スタイルとしてひとつの選択肢足り得るのでは、と考える変わり者も必要となりつつある、と報告者は密かに思案している。

すると、果たして現代のように議論の深みが増す一方で幅は極端に狭まりつつある時代において、こうした問題意識に叶う経済学者が存在するのか、という疑問が湧いてくるはずであるが、報告者は3年前に他界したA.O.ハーシュマン（1915－2012）の著作が大きな参考になり得る、と考えている。上述した議論との関連で言えば、彼は「型通り」の議論をほぼ理解しながらも自身は「型破り」の議論を展開し続け、交流範囲が広い一方で師弟関係はほとんど持たない、という極端な部類に属する学者で、やや誇張気味に言えばノーベル賞クラスの頭脳を持ちながらも学際的研究に長じたあまり、長らく「敬して遠ざける」扱いを受け続けた人物、と総括できる。それ故、毀誉褒貶も激しく未だ評価が定まらないのも事実であるが、本報告では新しい切り口を提示し、その妥当性を検証しながら通説的理解に一石を投じてみたい、と思う。

Ⅰ．通説的理解

ハーシュマンの通説的なイメージを語る前に断っておくべきこととして、彼の遺した著作の量・質、そして破天荒とも言える経歴と交友関係の広さに思いを致すと、彼の全体像[2]を理解している人はほとんどいない。換言すると、著作に関する評価にせよ、経歴・行動面に関する評価にせよ、一部に目を通した段階で評価しているものが圧倒的に多い。これ

---

[1] ）Banerjee＆Duflo（2011）（邦訳、2012）を参照されたい。
[2] ）【付録】を参照されたい。なお、久松（2014）に掲載された年表も非常に有益である。

は、多くの分野に及ぶ研究成果を残しながら、一方で看過しがたい主張のブレも指摘されてきたハーシュマン自身にも責任なしとは言えない。とはいえ、代表的な評価の紹介なしには議論が進まないので、以下では好意的なもの、批判的なもの、そして中立的なものを紹介しておく。

ポジティヴな評価と言えば、中道（穏健）左派のエコノミスト、戦間期における欧州から米国への亡命知識人の大物、といったものである。中道左派というイメージは、主著『経済発展の戦略』(1958）にて前方連関効果（供給効果を重視）と後方連関効果（需要効果を重視）の挟み撃ち戦略（重心は後方連関の方に置く)、そして輸入代替工業化政策を論じている箇所、それから（同じく）主著『離脱・発言・忠誠』にてオルソンやフリードマンの言説を批判している箇所に大きく依拠している。亡命知識人に関しては、特にマルセイユ滞在期にドイツ・オーストリア系のユダヤ人の救出を命懸けで敢行したことがつとに有名である。

これとは反対にネガティヴな評価と言えば、特に主著『情念の政治経済学』(1977）以降で指摘されがちだが、「転向者（左翼から日和見へ)」「便利屋（学派不詳)」といったものである。こうした辛辣な指摘は、同年代で開発経済学に大きく関わった大物、特にプレビッシュ（途上国に寄り添う姿勢を崩さず、終生 UNCTAD や ECLAC に活動の軸足を置いた）やミュルダール（学際的な研究を展開しつつ、最終的には制度学派に収まった）と比べてみた時に、否応なく際立ってしまう。

そして、中立的な評価として（便利屋という批判と一部重なるが)「孤高の経済学者」という、「敬して遠ざける」口実にもなりうるオマージュが出てくる。

いずれもそれなりの根拠がある評価に違いないが、このままだと議論が混乱したまま教科書的な解説に入ることになるので、以下では報告者なりの仮説を示す。

Ⅱ．報告者による仮説

上述した通り、ハーシュマンはどの時期の著作や交友関係を重視するかで評価が大きく変わり得る人物、有り体に言えば毀誉褒貶の激しい学者である。換言すると、青年期から壮年期、そして晩年に至るまでの彼の理論・思想を包括的な枠組みの中で評価しようとした試みが、彼の知名度に比すれば意外なほど少ない、と指摘できる。

この点を踏まえ、本報告では以下の仮説を主軸としてハーシュマンの業績を分析してみたい、と考える。

仮説：ハーシュマンは青年期から晩年に至るまで、一貫して二分法的な考え方を拒絶してきた。むしろ、二分法的な考え方から生じる空隙に対し、自身の洞察力をもってしてそれを埋める業績を残したことにこそ、彼の真骨頂がある。

この仮説に少しだけ補足解説を加えておくと、「二分法的な考え方」というのは「大きな

政府か、小さな政府か」などに代表される二者択一式の問題の立て方を指す。「自身の洞察力をもってしてそれを埋める業績」とあるのは、後述するがハーシュマンの著作には驚くほど心理的描写が多用されており、簡単に言えばミクロ経済学とは異なるミクロ的経済・社会分析に成功を収めていることを指す。

Ⅲ．理論・思想面からの検証（著作群より）

ここでは、主に通俗的なハーシュマンのイメージからかけ離れてはいるが、しかし看過しがたいポイントを列挙したい。

まず指摘したいのは、同年代の開発経済学者の中では珍しい特徴と言えるが、発展途上国の停滞要因として（当該国の資本・人材などの不足や社会制度の不備を問題視する）内部要因を重視するか、それとも（過去の植民地支配、国際分業体制の負の遺産とも言うべき）外部要因を重視するかという場合、ハーシュマンの議論はほとんど前者のタイプのものばかりである。当然の如く、従属学派や構造学派、世界システム論との接点はなく、むしろ「運命論者」「宿命論者」として批判の対象にまでなっている。それも彼の手掛けた開発経済学の実証研究の対象が、ほとんどラテンアメリカであったにも関わらず、である。先進国と途上国の境界線は不動に非ず、という動態利潤説に近い信念に基づいた言説と思われるが、壮年期に「楽観主義者」、そして生涯を通して「学派不詳」と呼ばれた所以がここにある、と言っても過言ではなかろう。

次に指摘したいのは、最大の謎とも言い得る彼の学派的な位置づけ [3] についてである。ケインズ経済学に一定の理解を示す姿勢を見せながらも、膨張傾向を見せる福祉国家には批判的であり、新古典派を批判する言説を残しながら、実は彼らにも利用可能な分析トゥールを提供していたりもする。経済学と政治学・社会学との架橋を目指した方向性は特異と言わぬにせよ、心理学や哲学の知見を参照しつつも歴史に深入りしない態度は、特異と言うより他にない。つまり、ケインズ経済学、マルクス経済学と新古典派という分類法はもとより、制度学派や歴史学派といった傍流の系譜に照らし合わせても、なかなか符号が一致しない。強いて言えば、「非合理性」や「不確実性」を重視しながら「小さな政府」寄りの議論を展開する傾向の強いオーストリア学派との親和性が指摘しうる。もっとも、一口にオーストリア学派と言っても、左翼のワルラシアンが少なくはなかった事実を考慮すると、これはやや強引な推測となる議論であるが。また、オーストリア学派とのいくつか共通点を持つとされるリバータリアンとの近接性についてであるが、「反・国家統制、反・官僚制、反・海外侵略」という点に関してはハーシュマンの主張と見事に符号が一致している。これが単なる偶然なのか、それとも意図的・作為的なものがあったのかを推測することは難しいが、後述する経歴、特にドイツ・オーストリア圏出身の知識人であること、そして自ら志願して従軍経験を積んだことと何らかの関連があった可能性を示唆するくら

---

[3] ）【図 1】を参照されたい。これに従うと、現在のアメリカの政治におけるハーシュマンの立ち位置は、(強いて言えば) 共和党ハト派に近いのではないか、という議論につながる。

いのことは可能、と思われる。もう少し踏み込んで述べると、ファシズムへの対峙姿勢の裏返しがリバータリアン的感性となり、生涯の行動指針のひとつとなった可能性は決して低くないであろう、という推測である。

最後に指摘したいのは、二分法を忌避したプラグマティストのハーシュマンの著作に「市場か、国家か」という問いをぶつけることは愚問でしかない、と思われるであろうが、基本的な重心は市場寄り、換言すれば「小さな政府」志向にやや重きを見せている点である。それは『越境論』（1981 年、邦訳なし）にて披露している議論であるが、経済発展のためには「企業家機能」（経済成長）と「改革機能」（再分配）の両方が必要であるものの、前者が必要条件で後者が十分条件であること、そして後者に関しては実施のタイミングが生命線という卓見である。つまり、成長が先で分配が後、さらに再分配のための介入が早すぎると「金の卵を産む鵞鳥を殺す」結果になり、逆に遅すぎると大規模な暴動を誘発するであろう、という議論である。これは鄧小平の先富論・南巡講話にも擬せられるスケールの大きな議論であり、軍事独裁政権下で社会主義を堅持した国と、アメリカや国際機関の援助を受ける条件として構造調整計画（新自由主義の先駆け）を採用[4]）した国、双方に向けられた警句と解釈すべきであろう。

Ⅳ．人物面からの検証（経歴・交友関係より）

ここでは、ハーシュマンの一般的理解に比較的近いものとそうでないもの、両方を紹介しながら、理論・思想面でカヴァーしきれなかった論点をいくつか補いたい。

まず、ハーシュマンを語るに際して、彼は膨大なアカデミック・キャリアを積み上げただけでなく、若き日においては自ら志願して従軍生活（西・仏・米）を送ったこと、壮年から晩年にかけては中南米の軍事独裁政権と対峙し続けた知識人への支援活動に尽力したこと、すなわち経済テクノクラートとは全く違った意味で実践経験を積んだ側面に言及しなくてはならない。自らの研究の本質を「（おおよそ 8 割方は）越境の技芸」（the Art of Trespassing）と称したほどプラグマティストを自認する彼が、ファシズム政権・軍事独裁政権を相手にすると決して妥協しない姿勢を見せるのは、「高潔」とも「奇異」とも言える特徴である。しかしながら、渡米後の経歴を見ると、いわゆる第三世界の高揚を象徴する出来事、例えばバンドン会議（1955 年）や UNCTAD の結成（1964 年）、資源ナショナリズムの極点とも言える NIEO 宣言（1974 年）などとは距離を置き続けた一面もあり、これはあたかも先述した「内部原因説」を裏付けるような印象さえ受ける。また、そもそもの話になるが、社会主義政権や「大きな政府」にも懐疑的な側面（これは不均整成長理論のライト・モチーフ[5]）でもあった）があった訳で、（結果論ではあるが）ハーシュマンが徹

---

[4]）付言すると、ハーシュマンの場合、産業インフラや社会インフラの整備を支援するプロジェクト援助に関しては好意的な見解を堅持していたが、援助や融資と引き換えに政策プログラムの採用を被援助国に迫るプログラム援助に関しては、如何なる内容のプログラムであれ、断固として反対する姿勢を終生貫き通した。

[5]）この理論は、民間部門の伸長、就中中小企業の育成を強く意識した節があり、戦後の台

頭徹尾、流行から大きくそれた異端的ポジションを歩み続けたことだけは確かと言える。

また、多くの学問分野を越境した原動力でもあり、博覧強記の証明とも言える幅広い交友関係についてであるが、その一方で師弟関係や共闘者と言える人間関係は希薄で、（学部学生相手の）大学教育においても非常に消極的だった、という意外な側面も指摘しておきたい。若い頃から数ヶ国語（英・仏・独・伊・西・葡）に通じており、財団・外部研究所との交渉にも長けていたハーシュマンであるが、親密な人間関係の話となると、親戚関係や亡命者の支援活動を別とすると、やや拍子抜けするほどエピソードの数が少ない。邪推すれば、学界において「八方美人」と「八方睨み」を繰り返した結果なのかもしれないが、好意的に解釈したならば、「学問の制度化」と「学問の専門化・細分化」が極度に進行した20 世紀後半にあって、「最後の徒花」のようなポジションに置かれたこと、すなわち過小評価された可能性も否定できない。

もっとも、こうした複雑な側面とは裏腹に、戦後のアメリカにおけるアカデミック・キャリアに関しては（少なくとも表面上は）恵まれたものであり、かつ分かりやすくもあった。と言うのも、コロンビアから帰国後の 40 歳代前半からイェール（ノン・テニュア）、コロンビア、ハーヴァード、プリンストン（後に名誉教授）と、当時も今もトップクラスのケインジアンが集う有名校を渡り歩き、実質は「学派不詳」であったにも関わらず、表面向きは「ケインジアン」であるかの如く、振る舞うこともできたのだから。

Ｖ．暫定的な結論と今後の課題

以上、理論・思想面と行動・実践面の二方面からハーシュマンの全体像に近づこうと試みてきたが、やはり両者の間に大きなズレが存在することは否定しがたい。だが、理論と実践は（程度の差こそあれ、誰にとっても）別物と割り切れば、どちらも（一般的な理解・イメージと比べた場合）青年期から晩年に至るまで、それほど大きなブレがない一面（とりわけ、行動面において）も浮かび上がってくる。大胆に推測すると、経済政策に関しては（成長と分配の両睨みを効かせた）プラグマティズム、政治体制には断固として（バラ撒き・談合に依存しない、自助努力を大前提とした）民主主義に拘ったことの表れが、こうした全体像を提示しうる根拠足り得る、とも考えられる。やや乱暴な要約となるが、以下にハーシュマン思想の骨子を定式化しておく。

要約：ポッシビリズム（可能性追求主義）＝「不確実性」＋「プラグマティズム」

簡単に補足としておくと、「ポッシビリズム（ポシビリズム）」はハーシュマン自身による造語であり、「プラグマティズム」はクルーグマンがハーシュマンを評した悪罵に等しい言い回し（「粗野なプラグマティスト」）であるが、報告者はこれを決してネガティヴには受け止めていない。むしろ、このプラグマティズムを体現したキーワードが「越境の技芸」

湾における成功事例の説明に、しばしば引き合いに出される。

であったり、「プルーラル（複数の）・エコノミクス」（1980 年代から新古典派一色に染まりつつあった、経済学への痛烈な批判）であったり、「漸進主義」であったと考えている。ハーシュマンの学際的研究が、社会科学（経済学・政治学・社会学）の枠さえ超えて人文科学（心理学・哲学）の領域にまで及んだことに対しても「度を越したプラグマティズム」「八方破れ」という批判は有り得ると思う。だが、報告者はハーシュマンにとっていずれの学問も優劣を論じる対象でなく、「頭を整理するための道具」に過ぎなかった、と推測する。

今後の課題として、「不確実性」の大前提とプラグマティズムを基調としたハーシュマンが、どこに理想、もしくは譲れない基準を見出していたのか、をもう少し掘り下げて議論する必要がある。特に晩年の著作は、国家主権よりも草の根保守（バークやトクヴィルの言説、経験主義の議論とも相性が良い）、民族自決よりも住民自決（リバータリアン好みの言説）という風に、よもやアナーキストまでに転向したのか、と見紛うばかりの言説が目に留まる。これはハーシュマンの言説に関する最大の問題点、もしくは謎と言い得る論点となるが、彼には若い頃より国民国家の枠組みや民族主義（ナショナリズム）を嫌悪、そしてダールが下位文化と称した言語・宗教・民族といった視点を無視する傾向が強く、年齢を重ねるに連れてそれがエスカレートした節すらある。ハーシュマン自身が亡命知識人であること、そして主に東西冷戦期にアカデミック・キャリアを積んだことは十分にカウントすべきであるが、心の奥底に宿った全体主義・権威主義・軍事独裁政権への反発だけがその行動モチーフであったとするならば、やはり批判的な論点の提出も避け得ないように思われる。

おわりに

当たり前の話であるが、半世紀を超えるアカデミック・キャリア、そして類例すら見出しがたいハーシュマンの豊穣な世界 6）を、一言・二言で要約することは難しい。だが、本報告では「不確実性」と「プラグマティズム」を組み合わせた柔軟な設計志向、「一元的世界観の峻拒」7）と「二分法的思考法の拒否」から派生した心理的分析の多用、といった特徴を炙り出しつつ、通俗的なイメージよりは「小さな政府」寄りの論者であったこと、そして「流水は腐らず」（呂氏春秋）にも似た魅力と危うさのバランスを崩すことなく、研究者生活を全うした人物であったことだけは、最後に改めて強調しておきたい。

---

6 ）東洋人の感性に訴える言い方をするならば、「自力本願」の意味では禅宗に、「柔」と「剛」の使い分けを説く姿勢は「老荘思想」に近いものがある。禅宗と老荘思想という組み合わせに奇異な印象を抱く向きもあろうが、建前を排したプラグマティズムこそが共通項、という解釈を施せば、両者を架橋することも可能と思われる。

7 ）ハーシュマンが（永続的な）均衡論や（非妥協的である）原理主義的な考え方を強く拒否し続けた傾向は、ほぼ一貫していたと言える。敷衍すれば、彼は「中心」概念を否定したという解釈も可能であり、管見の限り、ドゥルーズとガタリ（共に哲学者）が考案した「リゾーム（多様体）」という概念、すなわち「始めも終わりもない」「根も幹もない」という思想に近い、と思われる。

【参考文献】

受田宏之・青山知佳・小林誉明（2010）「開発援助ではつくれない社会生活　－なぜ複眼的な視点が求められるのか－」（青山知佳・受田宏之・小林誉明（編著）『開発援助がつくる社会生活　現場からのプロジェクト診断』，大学教育出版，2010 年，所収.）

絵所秀樹（1997）『開発の政治経済学』日本評論社.

高　英求（2006）「（書評）A.O.ハーシュマンの「ポシビリズム」　矢野修一『可能性の政治経済学　ハーシュマン研究序説』（法政大学出版局，2004 年）」『貿易風』（中部大学国際関係学部論集）第 1 号，358－360 ページ.

高橋直志（2009）「（書評）アルバート・O．ハーシュマン　連帯経済の可能性　－ラテンアメリカにおける草の根の経験」『ラテン・アメリカ政経論集』（ラテン・アメリカ政経学会）No.43，103－107 ページ.

――（2012）「開発援助はなぜ失敗し続けるのか　－A.O.ハーシュマンの見解を中心に－」『名古屋外国語大学　外国語学部　紀要』第 42 号，207－225 ページ.

――（2013）「ハーシュマン理論の再解釈に向けての覚書」『名古屋外国語大学　外国語学部　紀要』第 44 号，225－245 ページ.

――（2014a）「経済成長優先論と民主的制度優先論の相克　－複眼的視点からなる設計主義の必要性－」『名古屋外国語大学　外国語学部　紀要』第 46 号，163－186 ページ.

――（2014b）「動態的貿易論の系譜　－戦間期貿易論の政治経済学－」『名古屋外国語大学外国語学部　紀要』第 47 号，133－150 ページ.

――（2015）「『exit-voice』モデルの拡張と検討課題　－国際政治経済学と開発論の視座より－」『同志社商学』第 66 巻第 6 号，21－44 ページ.

原田太津男（1996）「政治経済学と Possibilism　～A.O.Hirschman の思想～」『中部大学国際関係学部　紀要』第 16 号，1－13 ページ.

久松佳彰（2014）「（書評）アルバート・O・ハーシュマンの伝記を読む」『国際地域学研究』（東洋大学国際地域学部）第 17 号，177－188 ページ.

本多健吉（2001）『世界経済システムと南北関係』新評論.

峯　陽一（1999）『現代アフリカと開発経済学　市場経済の荒波のなかで』日本評論社.

本山美彦（編）（1995）『開発論のフロンティア』同文館.

矢野修一（2004）『可能性の政治経済学　ハーシュマン研究序説』法政大学出版局.

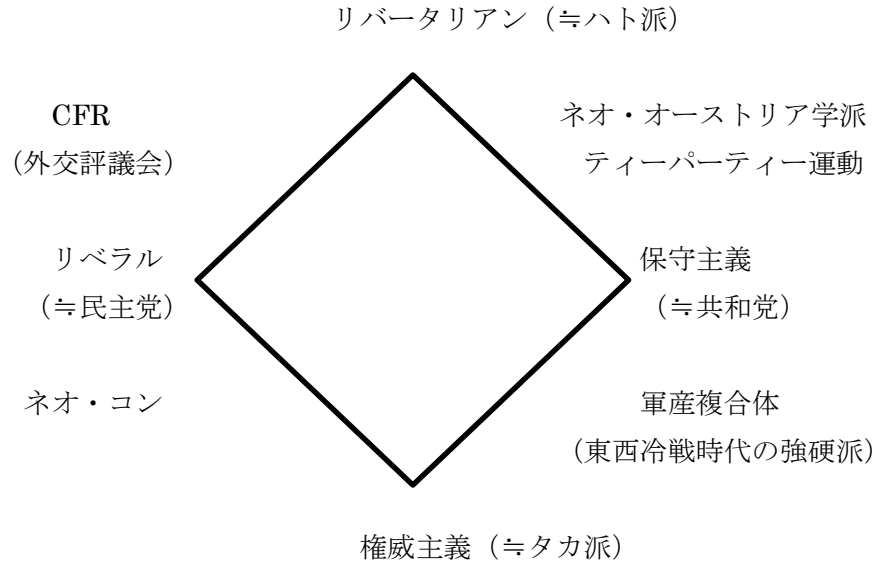
Banerjee,A.V.,and　E.Duflo（2011）*Poor Economics A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty*,Public　Affairs.（山形浩生訳『貧乏人の経済学　もういちど貧困問題を根っこから考える』みすず書房,2012 年.）

Hirschman,A.O.（1945）*National Power and the Structure of Foreign Trade*,Berkeley:University　of　California　Press.（飯田敬輔監訳『国力と外国貿易の構造』勁草書房，2011 年.）

――（1958）*The Strategy of Economic Development*,New　Haven:Yale

University Press.（麻田四郎訳『経済発展の戦略』巌松堂出版，1961 年.）
――（1963）*Journeys Toward Progress:Studies of Economic Policy-Making in Latin America*,New York:Twentieth Century Fund.
――（1967）*Development Projects Observed*,Washington,D.C.:Brookings Institution.（麻田四郎・所哲也訳『開発計画の診断』巌松堂出版，1973 年.）
――（1970）*Exit,Voice,and Loyalty:Responses to Decline in Firms, Organizations,and State*,Cambridge,Mass.:Harvard Univesity Press.（矢野修一訳『離脱・発言・忠誠　－企業・組織・国家における衰退への反応－』ミネルヴァ書房，2005 年.）
――（1971）*A Bias for Hope:Essays on Development and Latin America*,New Haven:Yale University Press.
――（1977）*The Passions and the Interests:Political Arguments for Capitalism Before Its Triumph*,Princeton,NJ.:Priceton University Press.（佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局，1985 年.）
――（1980）"The Welfare State in Trouble:Systemic Crisis or Growing Pains？," *American Economic Review*,Vol.70,No.2,pp.113－116.
――（1981）*Essays in Trespassing:Economics to Politics and Beyond*,Cambridge:Cambridge University Press.
――（1982）*Shifting Involvements:Private Interest and Public Action*, Princeton,NJ.:Princeton University Press.（佐々木毅・杉田敦訳『失望と参画の現象学－私的利益と公的行為』法政大学出版局，1988 年.）
――（1984）*Getting Ahead Collectively:Grassroots Experience in Latin America*,New York:Pergamon Press.（矢野修一・宮田剛志・武井泉訳『連帯経済の可能性　ラテンアメリカにおける草の根の経験』法政大学出版局，2008 年.）
――（1986）*Rival Views of Market Society and Other Recent Essays*,New York:Elisabeth Sifton Books／Viking.
――（1991）*The Rhetoric of Reaction:Perversity,Futility,Jeopadardy*, Cambridge,Mass.:Harvard University Press.（岩崎稔訳『反動のレトリック－逆転，無益，危険性』法政大学出版局，1997 年.）
――（1995）*A Propensity to Self-Subversion*,Cambridge,Mass.:Harvard University Press.（田中秀夫訳『方法としての自己破壊－〈現実的可能性〉を求めて』法政大学出版局，2004 年.）
――（1998）*Crossing Boundaries:Selected Writings*,New York:Zone Books.
Meldolesi,L.（1995）*Discovering the Possible:The Surprising World of Albert O. Hirschman*,Notre Dame:University of Notre Dame Press.

【図 1】現代アメリカの政治思想とハーシュマンの立ち位置



（森村進（2001）『自由はどこまで可能か　リバタリアニズム入門』講談社現代新書，14ページ,「ノーラン・チャート」を基に報告者作成.）

（注1）　リバータリアンは「反・国家統制、反・官僚制、反・（過剰な）福祉国家、反・重税、反・海外侵略、反・徴兵制」を骨子とする政治思想で、西部開拓の時代に起源を発している。現在のアメリカでは、共和党ハト派、ティーパーティーにこれを支持する人が多い。

（注2）　権威主義とは、軍事独裁体制を大前提としつつも経済活動は自由を原則としており、この点では国民を総動員する全体主義（ファシズム）と決定的に異なる。もっとも、「ノーラン・チャート」を作成したノーラン自身は、ポピュリズムと権威主義をほぼ同一視しており、全体主義はその極端な例としている。

ハーシュマンの立ち位置（特に晩年）は、大きく言えば共和党ハト派のマトリックス（「小さな政府」寄り、かつ個人主義に立脚した民主主義を重視）に収まるのではないか、という見方が、本報告における仮説である。

【付録】

（1） ハーシュマンに関する略年表（一部、プライベートの事情も含む）

1915 年　ベルリン生まれ。（ユダヤ系ドイツ人として出生）

1923 年　フレンチ・ギムナジウムに入学。（9 年間在籍）

1932 年　フレンチ・ギムナジウム卒業。ベルリン大学法学部に入学。（経済学専攻）

1933 年　父（外科医）死去。ナチスが政権を奪取。以前より反ナチス運動に参加していたため、身の危険を感じてフランスに出立。

1934 年　パリ HEC 経営大学院に入学。会計や経済地理学を学ぶ。

1935 年　義兄コロルニに会う。奨学生として、LSE（ロンドン）に留学。（1 年間）

1936 年　スペイン内戦に義勇軍として参加。（内部の裏切り行為に幻滅し、早々に離脱）
ケインズ『一般理論』出版。（開発経済学に限っても、ルイス、プレビッシュ、ヌルクセ、ミュルダールらに絶大な影響を及ぼす。だが、ハーシュマンはこれに一定の理解を示しつつも、晩年の著作において経済学の中の「一種の教義」以上の受け止め方をしていない、と述べている。）

1937 年　トリエステ大学にて統計学助手。イタリアの人口・経済問題に関する研究に着手。

1938 年　トリエステ大学から博士号を得る。（経済学博士。なぜか、論文は非公表）
フランスに戻り、パリ経済社会調査研究所の研究員となる。

1939 年　フランス陸軍に志願。第二次世界大戦が始まる。

1940 年　フランス敗戦。マルセイユで亡命者を支援。年末に自身も亡命。

1941 年　ロックフェラー財団の奨学金でアメリカに入国。同国にて結婚。
カリフォルニア大学バークレイ校に研究員の立場で在籍。

1943 年　アメリカ陸軍に入隊。（従軍中に市民権を取得）

1945 年　『国力と外国貿易の構造』出版。（著書として初、実際の執筆は 1941～1942 年）

1946 年　商務省に入省。ガーシェンクロンの誘いで FRB に勤務。

1948 年　マーシャル・プランに参画。（当初は意欲満々であったが、次第に幻滅）
ECA（経済協力局、大統領直属機関で国務省としばしば衝突）に出向
サミュエルソン『経済学』出版。（経済学の制度化が本格化し始めた時期）

1952 年　コロンビアの首都ボゴタにて、国家経済局の財政顧問。（世界銀行から派遣）

1954 年　私的な経済コンサルタントとして、コロンビアに留まる。

1956 年　イェール大学のリサーチ教授に就任。（ノン・テニュアのポスト）

1958 年　（主著）『経済発展の戦略』出版。コロンビア大学国際経済学教授に就任。

1963 年　『進歩への旅』（邦訳なし）出版。

1964 年　ハーヴァード大学政治経済学教授に就任。（ガーシェンクロンによる誘い）

1965 年　マンサー・オルソン『集合行為論』（新古典派の立場よりフリーライダー問題を論じた書、ハーシュマンはこれを『離脱・発言・忠誠』にて批判）出版。

1967 年　『開発計画の診断』出版。
　　フリードマンによる反ケインズ宣言（アメリカ経済学会、会長講演）
1970 年　（主著）『離脱・発言・忠誠』を出版。
1971 年　『希望へのバイアス』（邦訳なし）を出版。
1974 年　プリンストン高等学術研究所の経済学教授に就任。（後に名誉教授となる）
　　（苦手だった教育の仕事から解放され、以後研究に専念）
1977 年　（主著）『情念の政治経済学』を出版。
1978 年　ラトガーズ大学より名誉学位を受ける。（最初の名誉博士号）
1981 年　『越境論　経済学から政治学、さらにその彼方へ』（邦訳なし）を出版。
　　この著書で、経済学からの引退を宣言。（これは、やや大袈裟な言い方）
1982 年　『失望と参画の現象学』出版。
1986 年　『市場社会の諸見解』（邦訳なし）を出版。
1984 年　『連帯経済の可能性』出版。
1991 年　『反動のレトリック』出版。
1995 年　『方法としての自己破壊』出版。（事実上の引退作）
1996 年　ウィーンで講演した後、郊外の山で大怪我。（この後、大きな活動なし）
1998 年　『境界を横切る』（邦訳なし）出版。（回顧録、この著作にて完全に引退）
2012 年　死去。（享年 97 歳）
2013 年　アーデルマン（歴史学）によるハーシュマンの評伝が出版され、好評を博す。

（２）　ハーシュマンの主要作品（要旨＆報告者による時期区分）
・時系列的な整理
国際経済学　→　開発経済学　→　組織論　→　主体論・思想研究　→　回顧録

・時系列的な整理に即した大まかな分類
国際経済学……（1945）
開発経済学……（1958）（1963）（1967）（1971）（1981）
組織論……（1970）
主体論・思想研究……（1977）（1982）（1984）（1986）（1991）
回顧録……（1995）（1998）
（＊）文献の出版年を表示している。文献のタイトルは、上掲の年表を参照されたい。

（率直に言えば）研究歴に関しては、まったく計画性なし。また、経済学への強い思い入れもない。さらに社会科学（経済学・政治学・社会学）の架橋的研究どころか、人文科学（哲学・心理学）との横断的・学際的な研究にまで、躊躇なく着手。

・アカデミック・キャリアに関わる大きな断絶
＜1950 年前後＞……マーシャル・プランに参画するも、不毛な議論や内部調整に嫌気。これがコロンビアに出向くきっかけになり、結果的に開発経済学の道を歩み始めたとされる。
＜1970 年代半ば＞……アジェンデ政権の崩壊劇（1973 年）に大きく落胆。これによって、実証研究から思想研究に関心事が移った、とされる。

（３）ハーシュマンの主だった交友関係（経済学以外の分野との交流も含む）
[コロルニ]……イタリア人。哲学者。ハーシュマンの義兄。スラッファの従兄弟。（あくまで、ハーシュマンによる記憶）ハーシュマンの研究、そして行動指針に最も大きな影響を与えたとされる人物。
[ガーシェンクロン]……元々はユダヤ系ロシア人。（ウクライナ西部の生まれ）ウィーン大学にて博士号を取得し、米国に亡命。経済史専攻。「後発性の利益」論は開発経済学にも大きな影響を及ぼす。アメリカにて、何度かハーシュマンの就職斡旋役を担う。
[セン]……インド人。経済学者にして倫理学者。ハーシュマンの姪と結婚。ハーシュマンの議論と共鳴する点も多々あるが、社会科学に対する基本的態度として、センが「科学」「倫理」を重視するのに対し、ハーシュマンは「（複数の学問分野の組み合わせからなる）技芸（アート）で良い」と公言しており、この点は学者として決定的な違いと言える。
[カルドーゾ]……ブラジル人。従属学派右派。「従属的発展論」で有名。後にブラジル大統領となる。
[オドンネル]……アルゼンチン人。政治学者。「官僚制的権威主義」「委任型民主主義」論で有名。権威主義と新自由主義との親和性にも言及。
[フォックスレイ]……チリ人。構造学派寄りのエコノミスト。民政復帰後（1990 年代）のチリで財務大臣・外務大臣を歴任。
[テンドラー]……ハーシュマン唯一の（コロンビア時代の）弟子と目される研究者。『熱帯における良い政府』（1997、邦訳なし）は高い評価を獲得。
[ダール]アメリカ人。政治学者。イェール時代の同僚。「自由化」と「参加」の視点より、民主主義体制の類型化を試みた。
[リンドブルム]行政学・政治学専攻。イェール時代の同僚。公共選択学派批判で有名。

【付記】
本稿は、世界経済研究会（2015 年 9 月 5 日、於：同志社大学）にて報告した内容を基に構成されている。本稿の作成にあたり、研究会の参加者各位からたいへん貴重なコメントを頂戴した。ここに記して深く感謝する。言うまでもなく、本稿に関する誤りの責任は、報告者が負うものである。